神保美佳のメモ★ランダム ――― VOL.59

福ならぬ「鬱袋」にならぬよう

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）

毎年日本のお正月といえば、明治神宮など各地の神社仏閣への初詣をはじめ、初日の出を拝んだり、近年では年越しライブ等、過ごし方も様々になっています。そんな中、私個人が毎年楽しみにしているのが「バーゲン」そして「福袋」です。

福袋といえば、TVなどでデパートに押し寄せるお客さんが、我先きに袋を奪い合う光景が思い浮かびますが、さすがにあそこまでの情熱や体力はありません（笑）。しかしインターネットや近くのお店で何かいいものが買えそうなら、ぜひ参加したい…と、年末が近付くとソワソワしてしまうのです。

私が初めて福袋というものを手に入れたのは、小学校高学年の頃だったと思います。お正月に母と出かけたデパートで一袋買ってもらい、家に帰ってから家族で開けてみたのです。すると、今でも覚えているのは「王選手のレコード」そして「中華フライパン」、あと何か雑貨がいくつか入っていて、その混沌とした中身に子供ながら感心。レコードは確か、ドーナッツ盤に写真がプリントしてある「ピクチャーレコード」になっていて、その豪華さにもビックリ。加えて、早速聴いてみた王選手の歌があまり上手とはいえなかったのにも、驚いたのでした。

思えば、福袋は当初売れ残りが雑多に詰め込まれ、家族で運試しに楽しむようなものでありましたが、若い層にも浸透していったのはおそらく80年代の「DC（デザイナーズ＆キャラクターズ）ブランドブーム」辺りからではないでしょうか。丸井やパルコ、そしてラフォーレ原宿といったデパートの初売りには、ファッションブランドの福袋を狙う十代の若者が殺到していたのを覚えています。その流れはずっと続いているようで、若い女性に人気の「渋谷109」福袋発売日には、毎年近くで不要な衣服の交換会が行われているのも、おなじみですね。

今年のお正月、並んで買った人気コーヒーチェーンの福袋です

しかし、私自身はそうした交換会が始まる前の世代ですので、アパレル系の福袋は外れを引くことが多いせいか、あまり購入しなくなっていました。ところが、2年ほど前いつも発売後すぐに売り切れてしまう某ブランドの女性向け福袋が、偶然ネットで買える状態になっているのを発見。…どうしよう。着られるものばかりじゃないだろうし…でも、いつも売り切れるからいいものが入っているのでは…？　カートに入れ迷うこと数分、いつの間にか会計を済ませていました。

果たして、数日後届いた久々のアパレル福袋でしたが、どうやら中身はそれ用に作ったとおぼしき品質の悪いものばかり。正直、どうしていつも売り切れるのか理解に苦しむようなアイテムの山を前に、本当に後悔したのを覚えています。そしてそういう福袋は、ネット用語では「鬱袋」と呼ばれているそうで、思わず納得してしまいます。

一方それとは逆に、近年よく買うようになっているのが食品関係の福袋。こちらは共通したものであっても、金額に見合う食事券が入っていたり満足できる中身が多いので、並んで購入することもあります。つまり、福袋は食品関係をメインにして、アパレルはバーゲンで好きなものを安く手に入れる。近年これが、私のお正月の定番になっています。

もしどうしてもアパレル福袋に興味がある場合は、粗製品が入っている可能性が高い共通の中身のものは避けるのが、できるだけ鬱袋に当らない秘訣ではないか…と、ある種の「必勝法」も考案し、次の年に向けて密かに備えているのです。